

2022年10月8日読書会用

第312回山口西田読書会（2022年9月10日開催分）プロトコル

佐野之人記

今回はエクスクルス（番外編）として「独我論からの脱却」の第一回（斜体字は佐野の付加）。

1. 西田は1906年3月25日に「今日宗教問題を考う、解決を得ず」日記に記し、その年の夏には『善の研究』第2編のもととなる部分を書き始めている。ここでは宗教問題を解決するような、宗教的覚悟を含みうる哲学的な根本経験が西田にあったことが明らかであるが、そのことをほぼ同時期に書かれたと思われる断片によって確認した。
2. その「哲学的根本経験」の内実を『善の研究』「序」によって「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」であることを確認した。これによって西田が3月25日時点で抱えていた問題とは「独我論」であり、その内実が「個人あって経験ある」であることも分かる。また「哲学的根本経験」が含みうる「宗教的覚悟」としては例えば西田がしばしば挙げるパウロの「既にわれ生けるにあらず基督我にありて生けるなり」などが考えられるとされた。そうしてその結果として「経験を能働的」に考えることができ、「フィヒテ以後の超越哲学」とも調和できるようになった、そのように考えられる。そのことをテキストで確認することがこのエクスクルスの目標である。
3. その際1905～1906年講義用の『倫理学草案第二』の〈倫理学ないし道德論〉末尾および「宗教論」と1906～1907年講義用の『善の研究』のもととなった第三編末尾と、「宗教論」に対応していると考えられる第四編（これは1906～1907年の講義では扱われなかった）を比較検討する。
4. 比較検討を導く根本的な問いは『倫理学草案第二』の叙述のどこが「独我論」なのか、それが『善の研究』ではどのように脱せられているか、である。それを考える際の着眼点は以下のとおりである。
 - （1）〈倫理学ないし道德論〉と第三編の末尾が異なる。それをどう解釈するか？
 - （2）「宗教論」と第四編の章立てに対応関係が認められる。それぞれの章について以下の着眼点を立てる。（第一章）「宗教的要求」の出处はどこか（「何が」要求しているのか）？
 - （3）（第二章）「見神の事実」の在り方は？
 - （4）（第三章）「神」とは？
 - （5）（第四章）「神人合一」とは？
5. 今回は『倫理学草案第二』のみを講読。〈倫理学ないし道德論〉末尾では「道德の極致」

が「至誠」として論じられながら、最後に「或人は至誠にて悪事をなすことなきやという」の一文で終わっている。これをどう解釈するか？

- ① 至誠にて行為して見ろ！できるか？と学生を葛藤に追い込み、至誠の不可能であることを悟らせ、次の「宗教論」につなげる。(Rさんはそうかもしれないと？…)
- ② 至誠は善悪を越えている。したがって悪はない。「凡ての行為が皆同一なる絶対無限の善」である。「或人」は「悪事をなすことなきや」と言うかもしれないが、そんなことはない、と言いたい。(N説)
- ③ 「至誠」はとても危険な思想になり得る。これ自体が「独我論」では？(T説?)。この説にしたがえば、「或人」云々はこうした「至誠」への疑問と考えられる。これを①同様、学生を葛藤に導いて「宗教論」に導くと考えるか、それとも…
- ④ 西田自身が分からなくなっている。(S説) 至誠は反省すべきものでなく、目的とすべきものでもない。その意味では善悪を超えた絶対善である。西田も偉人、詩人、禅における修養にその実例を認めているように、かかる境地を認めないわけではないが、反省を不可避とする我々(吾人)にとっては自分が至誠にて為したと思った行為に対して〈本当にそうか、それは悪ではないのか〉という問いが起こらざるを得ない。またそこから道徳の立場として至誠を新たな目的とせざるを得ない(事実この箇所は「道徳の極致」として、道徳の立場において論じられている)。反省も道徳も「我あり」というところを出発点とするならば、それは「独我論」となるが、我々(吾人)はそうせざるを得ない。西田にこの時点で自らの立場が「独我論」であることについての自覚があったかどうかは分からないが、ここにはこうした独我論の苦しみが表出されているのではないか。

6. 「宗教的要求」の出処について。以下の一文が問題になった。「元来吾人が宗教的要求を起すのは単に知意の上に於て主客の衝突、有限無限の矛盾を解決せんとするのみでなく其根底に於てするのであるから(宗教は自己の解決である)、解決も亦吾人の精神全体の上に於て起るのである。(即靈性の上に事実である)」。まず「根底に於てする」の「する」が「宗教的要求を起す」ではなく、「矛盾を解決せんとする」であることが確認された。この一文によるならば「宗教的要求」の出処は「吾人」であるが、この「吾人」をどのように考えるか？

- ① この一文の前に「自分の知識や意思では到底之の(主観客観の衝突の：引用者)解決ができぬから自己以上の或物に頼り之に由りて此の衝突を去り主客の一致を得んとするに至る。これが吾人の宗教の起源である」とある。これは自分の知識や意思ではどうにもならないから〈助けてください〉と神に頼ることであるから、そこにはなお「頼る」自分が残っている。それ故この「吾人」は知意からなる自己であって、その「根底」の「自己」ではない。(R説?)
- ② 「吾人」は知意とその根底をも含めた全体的まるごとの「自己」そのものである。

「宗教的要求」はそうした「自己＝吾人」の根底からの要求である。(T説?)

7. 「見神の事実」について。以下の文に注目した。「吾人が無限なる実在の大勢力に対し自己の無力を感じるとき、自己は此の絶対無限の中に包容せられ直に神の存在を確信するに至る。(雄大なる自然、人生の不幸、偉人の烈心等)。自己の活動の中に神と相触れ神の活動を感じるのである。之を見神の事実という」。この「自己の無力」は「衝突を解決できぬ」時に感ずる「無力」ではない。「実在の大勢力」に触れた時の「無力」である。この無力は「直に」「神」に「包容」されるような無力である。そうして「自己の活動の中に神と相触れ神の活動を感じずる」ような無力である。その時に「吾人」は「自己の本体に復帰」し「吾人が浮薄の思想を去り真摯なる本心に帰する」。この時に「自己は宇宙の本体に合し無限の歓喜を得る」とされる。それでは「此の有限にして無力なる人間が如何にして絶対無限なる神と合一し無限の歓喜を得ることができるか」。
8. 「神」について。次の一文が問題になった。「神は吾人の宗教的要求を充す絶対無限の勢力である」。これによれば「宗教的要求」を起すのは「吾人」であるが、それを充すのが「神」だということになる。「吾人」と「神」の関係はどう考えたらよいのか？またここでは「神」が一方で『善の研究』同様に「宇宙の根本」「統一」とされながら、他方で「永遠」なる「創造」を行う者（造物主）とも考えられていることが確認された。『善の研究』では神が「造物主」であることは否定されている。
9. 「神人合一」について。まず「元来人間は神性を有し居る者であって、神は吾人の本体（真正の自己）であると述べられる。問題は「元来」とか「本体」、「真正の」という言葉の意味である。「如何なる意味に於て人間は神性をもつて居るか」？まず「人間は（動植物より）一層深き意義に於て神性を有する」とされる。何故なら人間は「自覚的」だからだと言う。西田は「自覚的」であることを「靈性」と言い換える。この「自覚」によって「元来神性的なる人間」に「罪惡」が生ずる。「自覚」とは「神にそむき私心を立す」ことだからである。しかしこの「罪惡」が「反て人生を富瞻ならしめ深遠ならしむる」とされる。「吾人の精神は罪惡によりて拡大せられ深遠に安らう」とも言われる。そうしてそれが「吾人の精神の完成」だとされ、それが「神からいっても神の発現の途である（ベーマー）。それでいかに人心が進むも人間が生き居る間は到底罪惡の要素を除去することはできぬ」とされる。つまり罪惡を抱えるままにそれは吾人の精神の完成であり、神の発現の途であるとされる。これは何を意味しているのか。
ついで「神人合一」について述べられる。それは「性の上での一致」であるとされる。神性も人性も無限にして自由であるとされながら、それは「吾人が神に帰する時」だとされる。そう言いながらその時でも「人間は何處までも無限となり自由となることはできぬ、唯此の如き潜勢力をもつて居るのみ」だとされる。そこで「人間は有限的神」だ

ということになる。今度はこの人心における「有限」の出処が探られる。そうして「神の中に有限の性、悪の性あり（ヤコブ・ベーメー）」とされる。これでは神性と人性がまったく同じになってしまう。そこで今度は「絶対悪」と「吾人の悪」を区別して神には悪はなく、「吾人」に「小善」としての悪を認めようとする。しかしそれでも「吾人が自ら欺く時」は「真の悪」であると認めざるを得ない。そこで「元来神性的なる人間は何故に自ら欺くか」が問題になる。しかしこれも「神性の悪」によることになる。そうして「故に宗教的の人間のみ真の悪に陥るのである」とされ、最後に「Erbsünde（原罪）」の一語を残して「宗教論」は終わっている。これは中断なのか、それとも原罪（真の悪に陥ること）こそが「吾人の精神の完成」であり、「神人合一」だということなのか。3月25日の日記の「宗教問題を考う。解決を得ず」がこの末尾のことを言っているとすれば、中断であろう。ならばこの中断の意味は何なのか。また「宗教的要求」「見神の事実」「神」「神人合一」についての考え方のどこが「独我論」なのか。